

# 静を好む釈迦・老子・大国主の思想

土屋好重

## A 東洋精神としての好静心・真我・平安

アツアのムンスーン地帯に属する印度・中国・日本には古くから静を好むという共通的な精神があった。西洋精神に対しての東洋精神の特質を好静心とそれに関連する真我および平安の三概念に把握して分析することにしよう。そしてその典型的な思想を釈迦と老子と大国主の考え方の中に見出して研究することにならうと思ふ。

好静心とか真我とかの東洋的な概念は、欧米流の哲学や心理学などの概念からは、どのように対比せられるべきものであろうか。欧米流の心理学的な概念に関しては、それを感情・意思・知識およびそれらを統合する統覚とに区分して、配置することにならう。そしてその感情の中に更に内向的な方面と外向的な方面と再外向

的な方面とを区分する方法を探ることにならう。また統覚についてもそれを直正的な方面と歪曲的な方面とに分けることにしよう。すると図表Iに示される如く、真我の概念が直正的統覚の概念と合致することになる。直正的統覚とは内向的感情としての好静心を一義的に重んじようとする活動である。それは闘争を好む外向的感情や新規なことを好む再外向的感情の如きものは、二義的・三義的にしか重んじない活動である。直正的統覚に対するものとしての歪曲的統覚はどのように活動するのであろうか。それは闘争とか新規とかの喜びの方を、静かさの喜びよりも重んじようとするものである。内向的感情を絶対的に求め、外向的感情などは相対的にしか求めぬ真我の立場が、和の世界を創造することになる。また内向的感情すなわち好静心を中心とした感情を基本として、知・情・意の三つの活動が統合せられる時、平安の世界が創

造せられるのである。

## B 根本仏教の原始經典における内寂

釈迦牟尼の思想を直接的に理解するためには根本仏教の原始經典である経集 (Sutta-Nipata) に依ることが必要である。そしてその中でも最も古いとされている彼岸道品 (Parayana) や義品 (Arihaka) などの詩句を探究する必要がある。それによると釈迦が寂靜とか靜かさとかを一義的に求めたことが分かる。それは彼の中核的な本質的な理念であった。それは内寂 (ajjhata santi) とも呼ばれる境地であって、次のような詩句によって表現されている。「内にて寂靜となるべし。比丘は他より寂を求めざれ」(義品九一九詩)。「内寂と導師が言う所のこの義」(同八三八詩)。釈迦が靜を好んだことは、「觸を遍知して寂靜を喜ぶ」(經集大品七七七詩)の語によっても理解される。寂を喜ぶことが好靜心の現われであるの言うまでもないところであろう。

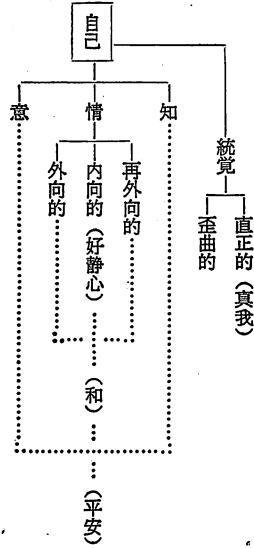
釈迦は自己という用語を、好ましい自己の意味にも好ましくない自己の意味にも、使用することにしていた。彼による好ましい意味での自己とは、いわゆる好く制御 (sandhana) された自己のことであって、それは図表Ⅱの真我の項のそれに該当するものである。自己の好く制御せられた時、寂靜の感情が一義的に重視されることになる。そこで次のような詩句が原始經典の中に見出されるのである。「自己の依所は自己のみなり。他に如何なる依所

あらんや。自己の好く制御せられたる時、人は得難き依所を獲得す」(法句經一六〇詩)。寂靜の理念が感情活動の全体を制御することによって和合の理想境が実現される。そして寂靜の理念が感情を中核として、知・情・意の各意識に浸透される時、そこに平安の理想境が実現するということになる。それは釈迦によって涅槃とか無上安穩とかの用語によって表現せられているところの境地である。

## C 道德經に見られる守靜・守柔の精神

老子は靜を好むことを重んじた。そこで「我靜を好みて民おのづから正し」(老子道德經五七章)の語を綴っている。靜を好むから靜を守り、また靜の系統であるすべてのことを守るのである。たとえば守柔とか守雌とかがそれである。また陰を重んじ母や谷や虚を重んずることも同じである。老子が我靜を好むと言う場合の我とは、私の徳のことであると判断される。今日では徳とは好ましい行ないのこととされるが、その根源は惠すなわち直き心の意義に由来するものである。直き心とは真我のことであり靜を一義的に求める心である。直き心としての徳は谷や虚の心でもある。谷心とは谷神にも通じ、靜を中核として動や冲をその中に包含する立場である。そこで老子は次のように論理を展開する。「其の雌を知りて其の雌を守れば天下の谷となる。天下の谷となれば常德 (直き心) 離れずして嬰兒に復歸す」(老子二八章)。また「萬

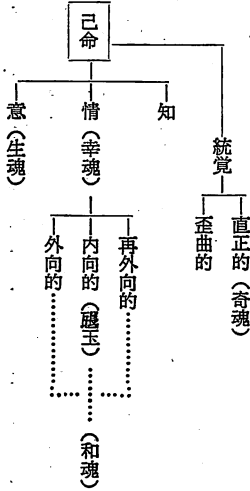
図表 I



図表 II

釈迦牟尼	好 静 心	真 我	平 安
老子	内 寂	よく制御された自己	無上安穩
守 静	奇 魂	玄 徳	恬 淡
静まり坐すことを求める和魂	奇 魂	平 世	

図表 III



物、陰を負いて陽を抱き、冲気をもって和をなす」(同四二章)とも主張されている。老子に従がうと、静を一義的に重視しつつ、理想的地であるといふ。それは和の境地に合するものであり、また平安の境地を現出するものである。図表IIはその平安の境地を恬淡という老荘風の用語で示している。ちなみに直き心としての徳の語は、上徳・孔徳・玄德なども表現されることがある。

D 志都の岩屋と静まり坐すことこの理想

シャーマニズムや我が国の古代神道においては、古くから物忌みという行事を行っていた。生石の村主真人の歌に「大己貴・少彦名のいましけん、志都の石室は幾代経ぬらん」(万葉集三五五)と言うのがある。志都の岩屋で大国主命が少彦名命と共に修業をしたのであると見られる。今日でもその跡を物語るものとして石見国の静間神社が具体的に存在している。物忌みとは物の気を避ける方法であって、自らの精神を真っ直ぐなものに正すための修業である。真っ直ぐな貴い心は彼によって奇魂と称されていたようである。それは櫛玉とも書かれるが串魂とも書けるものである。何となればそれは己の心を串のように真っ直ぐに正しく保たせる精神だからである。奇魂は図表IIIに記されているように直正的統覚に相当するものである。

志都の岩屋とは元來は静かさを修めるための斎屋を意味したことであろう。それは物忌みのための斎い場に他ならないのである。いづれにしても大國主は静かに坐すことを好む修業者であつた。そこで彼が静まり坐すことを理想としていたことが、次のように文獻の処々に残されている。「八雲立つ出雲國は我が静まり坐す國」(出雲風土記)。「皇御孫命の近き守神として八百丹杵築宮に静まり坐しき」(祝詞)。彼は単に自分が静まるばかりでなく他の者も静まることを念願するものであつた。そこで左記の如き文章も伝えられている。「大穴持命の申し給わく、皇御孫命の静まり坐さん大倭國」(祝詞)。彼は静まり坐すことを求めると共に、静かな自然環境の中に住むことも求めた。彼が「玉櫛の内つ國」とか「青垣山」とか「倭の青垣・東の山上」とかの言葉を使用してゐるのはそのためであらう。

大國主や少彥名の時代においても知・情・意に照応するような考え方が行なわれていた。たとえば生魂(意)とか幸魂(情)の如くである。また生井(意)・福井(情)・網長井(知)の三井神の場合の如くである。大國主は最初の内は、知・情・意の三方面が均衡のとれた人物であることを理想像として考えていたようである。少なくとも情と意における平均的な均衡を理想的なものとしていたようである。彼のそのような理想的人間像を背景として作られた神社の代表的な一つが恐らく難波の生國咲國魂神社である。それは大國主の意志(生魂)の方面と感情(咲魂)の方面とを対

立させて祭つてゐるものである。

図表Ⅲは大國主の精神面における用語を、現代の心理学的な用語に対比せしめて、示したものである。恐らく志都の岩屋で修業してから以後のことであるが、大國主は知・情・意の体系で物を平衡的に考えることを止めるようになった。そして統覚に立脚した感情中心的な幸魂・奇魂の体系で物事を直正的に判断するようになった。それは奇魂の統制の下において、幸魂の重要さを確實ならしめようとする立場のものである。その立場が記述されている文章には次の如きものがある。「大己貴神の曰わく。唯然なり。すなわち汝は此れ吾が幸魂・奇魂なりけりと知りぬ」(日本書紀)。幸魂・奇魂はこれを和魂と稱することもある。そして大國主の和魂に関しては左記のような解説も伝承せられている。「曰命(大國主命)の和魂を八咫鏡に取り託けて、倭大物主・櫛應玉命と名を稱えて、大御和の神奈備に坐せ」(祝詞)。大國主は自己の和魂を人格化し、客觀的に對象化して、それに崇敬の念を抱かしめようとしたことになる。

應玉とは嚴魂のことであると神道の専門家たちによつて解釈されている。それがどのような内容のものかは明確にされていない。けれども図表Ⅲの如く、それを和魂の中核としての内向的感情と解することも出来るのではあるまいか。それが静まり坐すことを好む好静心に当たることが当然のことである。最後に大國主の終局的な理想を見ると、それは平らかな世とも言わなければならない。

のなる。文献の中には「我が造りまして令す國は皇御孫命、平  
世と知らせ」(出雲風土記)の語が記されている。

(つちや・よししげ、経営倫理、愛知学院大学教授)